

2023 年度 人文学類授業評価アンケートについて

人文学類 FD 委員会

人文学類 FD 委員会では、2023 年度に実施された授業評価アンケートの結果を公開いたしますとともに、問題点や課題を明らかにすることで、人文学類における今後の授業改善に向けて役立てていただきたいと思います。

以下の表に記した数値は、総回答者による各選択肢の回答比率を示しています（合計値 100%、まるめの誤差のため合計が 100% にならない場合あり）。また、「平均得点」は各解答欄の選択肢の番号（1～10）を評価点とみなして計算した場合の平均を示しています。

なお、今年度から質問項目や評点の表記法が一新されたため、前年度との比較を行うことは今回は断念したことを申し添えておきます。

対象学期：2023 年度（第 1Q～第 4 Q）

対象科目数：人文学類専門科目 115 科目

総受講者数：6147 名

回答者数：5826 名（回答率 94.8%）

昨年度（回答率 80~85%）からさらに 10%程度向上（昨年度、成績開示と紐付けした効果がさらに上がったものと思われる）。

授業内容の適切性

Q1 この授業は、あらかじめシラバスに示された学修目標や授業計画に沿って行われましたか？

1.まるで違つた(-5~-4)	2 (-4~-3)	3 (-3~-2)	4 (-2~-1)	5 (-1~0)	6 (0~1)	7 (1~2)	8 (2~3)	9 (3~4)	10 全くその通り (4~5)
0.4	0.2	0.4	0.7	0.7	23.7	4	8.8	13.2	47.9

平均得点 8.46

最高評価の（10）が 5割弱、高評価の目安となる（8）以上で算定すると 7割を切り、最高評価の（10）が 5割を越え、（8）以上が 7割 5分以上に達した昨年度と比べるとやや低めの評価になっている。また、完全否定ではないにせよ、肯定度の低い層（可もなく不可もない）が全体の 4 分の 1 近くを占めていることも目を引くところである。授業の内容と学修目標が合致していることを意識的に確認する機会を授業中に設けることなど、多少の工夫の余地はありそうである。

担当教員の説明の仕方

Q2 この授業における教員の説明の仕方は、分かりやすいものでしたか？

1.まるで違った(-5~-4)	2 (-4~-3)	3 (-3~-2)	4 (-2~-1)	5 (-1~0)	6 (0~1)	7 (1~2)	8 (2~3)	9 (3~4)	10 全くその通り (4~5)
0.4	0.3	0.6	0.7	0.5	23.9	4.4	9	13.5	46.7

平均得点 8.43

Q1 と同様、最高評価の（10）が5割弱、高評価の目安となる（8）以上は全体の7割程度ということでQ1同様、昨年度と比べるとやや低めの評価になっている。とはいっても、全体の7割が高評価なのだから、決して悲観的になる数値ではないと言うこともできるだろう。他方、ここでも判断保留気味の層が全体の4分の1弱、存在しているのは気になるところである。これに対して、マイナス評価は、2.5%と昨年度の4%弱よりも低下している。誤差の範囲のようにも思われるが、講義についていけない学生の割合が減っているのであればその点は評価することができるだろう。講義内容のレヴェルを落とすことなく、より多くの受講者の理解度が高められるような授業を行うことは容易なことではないが、今後も引き続きたゆまぬ努力が求められるところであろう。

授業外学修時間

Q3 この授業について、授業外学修（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？

0時間	1時間	2時間	3時間	4時間	5時間	6時間	7時間	8時間	9時間以上
4.9	62	18.6	5	1.4	1.5	0.7	0.1	0.4	5.4

全体の6割強が1時間、およそ2割が2時間と回答しており、おそらく、このあたりが現状での授業外の平均的な学修時間であるように思われる。1時間と回答した学生が昨年と比べ5ポイント程度増大し、2時間のグループはほぼ横ばいとなっている。準備に多くの時間を要する少人数の演習科目はアンケートの対象からほとんど除外されているため、ここでは総じて低めの数値が出る傾向にあるが、20人に1人が対象科目に関してはまったく授業外学修をしていない、というのはさすがに問題であろう。なお、今回も平均値を算出していない。それは、前回同様、長時間の学修を申告する例が相当数にのぼり、それをどう解釈するか判断し難い面があったためである。具体的に実数で示すと「30時間」が98名、「60時間」が29名いた。「30時間」以上は全部で151名（全体の3.4%）となり、さすがに前年度の244名（全体の4.8%）を下回ったものの、それでも無視できない数値を示している。ちなみに回答可能な最大値である「99時間」と回答し

ている者も今年も2名いた。設問では「総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算」するよう求めているのだが、こうした基準に照らしてこれらの数値はいさか過大であり、今回も授業1回あたりではなく、当該の授業の全回分に要した時間を回答した学生が一定数いたであろうと推測せざるを得ない。この点については、アンケート回答時に注意を喚起するなど、今後、対策を講じる必要があるかもしれない。

授業理解度

Q4 この授業の内容を、よく理解できましたか？

1.まるで違った(-5~-4)	2 (-4~-3)	3 (-3~-2)	4 (-2~-1)	5 (-1~0)	6 (0~1)	7 (1~2)	8 (2~3)	9 (3~4)	10 全くその通り (4~5)
0.3	0.3	0.5	0.7	0.5	24.4	5.7	11	16.7	39.7

平均得点 8.29

最高評価の(10)が全体の4割、(8)以上で7割弱程度という評価は他の項目とほぼ同じであり、可もなく不可もないという評価がおよそ4分の1を占めるというのも他項目と共通するところである。授業の理解度が低いと感じた学生は、Q2で教員の説明が十分に分からなかったと感じた層と重なり合っていることは想像に難くない。その意味では、教員の説明に消化不良を起こす学生の比率を減らすことが結局のところ、全体の理解度をアップさせることに直結すると言えそうである。

学修目標達成度

Q5 この授業であなたは、シラバスに記載された学修目標を達成できましたか？

1.まるで違った(-5~-4)	2 (-4~-3)	3 (-3~-2)	4 (-2~-1)	5 (-1~0)	6 (0~1)	7 (1~2)	8 (2~3)	9 (3~4)	10 全くその通り (4~5)
0.3	0.2	0.3	0.6	0.4	25.1	6	11.7	17.7	37.7

平均得点 8.29

最高評価の(10)が全体の4割を切り、(8)以上でも62%程度と、他の項目と比べてやや低めの評点になっている。他方、他の項目同様、およそ4人に1人の学生が中間の評点であるについても気になるところである。この点については、実際の講義の内容とシラバス記載の学習目標の連関度を意識して明確にする努力も求められるであろう。また、各自の達成度を問う設問に対して、抑制的な自己評価を下しがちな学生心理が影響している可能性も考慮に入れるべきかもしれない。

授業満足度

Q6 この授業の内容は、満足できるものでしたか？。

1.まるで違った(-5~-4)	2 (-4~-3)	3 (-3~-2)	4 (-2~-1)	5 (-1~0)	6 (0~1)	7 (1~2)	8 (2~3)	9 (3~4)	10 全くその通り (4~5)
0.4	0.2	0.3	0.9	0.4	24.4	4.9	8.8	13.8	46.9

平均得点 8.52

最高評価の（10）が全体の5割に達していないのは昨年には劣るもの、8以上が受講者の7割を超えている点を見れば、おおむね高評価であると結論づけることができるだろう。他方、相対的な低評価層は相変わらず4分の1程度、存在していることも看過できない点である。この層は昨年度と比べて5%程度、増大しており、この位置の学生の満足度を向上させることが全体の底上げに直結するものと思われる。

<まとめ>

最高評価の（10）が全体の5割を越えていた項目が昨年度は3つあったのに対して今年度はゼロであるのはいささか残念な結果であるが、人文学類の専門科目の授業は、それでも十分に高い水準は維持していることが確認されたように思われる。その一方で、相対的に低めの評点を出す層も、各項目で4分の1程度程度、存在しており、とりわけQ4の授業理解度やQ5の学修目標達成度の項目が他と比べて相対的に低めの評価になっていることには注意を払う必要があるだろう。受講するすべての学生が授業に積極的に取り組み、そこから各自が十分な成果を得ることが理想であることはいうまでもないが、講義内容の専門性が高まれば、それだけ、万人の興味を引くのは難しくなっていくことも容易に推察されるところである。このあたりのバランスのとり方については今後も試行錯誤を重ねていく必要があるだろう。